知財アナリスト　武藤謙次郎が読み解く

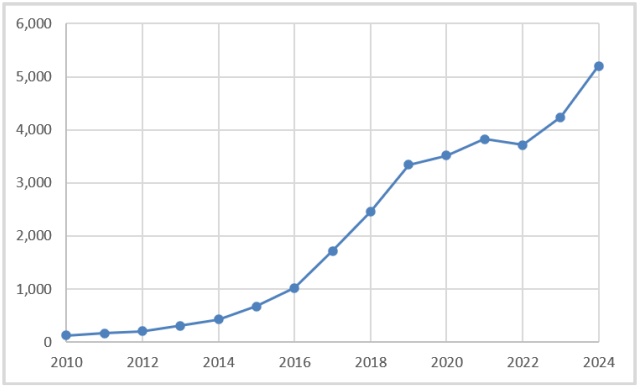
専門業務へ広がる生成 AI
特許情報から見る自然言語・テキスト解析の用途変化

生成 AI の普及によって、文章の作成や要約、翻訳などに AI を使うことは、すでに身近なものになりました。最近では、こうした個人利用にとどまらず、企業の専門業務そのものに AI を組み込む動きも進んでいます。2026 年 5 月には、KPMG が Anthropic と提携し、「Claude」を監査、税務、法務、アドバイザリーなどの業務に導入すると発表しました。法律分野でも、契約書のレビューや修正、情報抽出、文書比較、ドラフト作成などへの活用が進められています。

大量の文書を扱うという点では、知的財産業務もこうした変化と無関係ではありません。では、特許情報から見ると、AI による自然言語・テキスト解析は現在どのような方向へ進んでいるのでしょうか。

1. 自然言語・テキスト解析は「文章処理」から「業務支援」へ

自然言語・テキスト解析は、人が書いた文章や質問から意味や文脈、意図などを読み取り、検索、分類、要約、翻訳、文章生成などにつなげる技術です。大規模言語モデルの普及で、その利用範囲は広がっています。



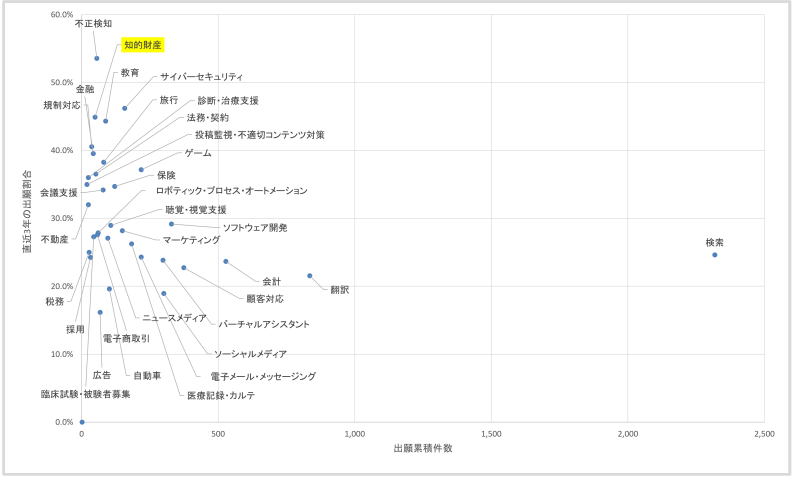
今回、「人工知能×自然言語・テキスト解析」分野について、米国特許を対象に分析しました。作成した検索式では 36,149 件が抽出され、出願件数は 2010 年代後半から大きく増加しています。直近では年間 5,000 件を超える水準となっており、出願件数では IBM、マイクロソフト、アルファベット（Google）などが上位に位置しています。

近年は技術内容も大きく変わっています。2000 年代には、音声認識や検索、辞書・構文解析など、個別の言語処理技術を組み合わせるものが中心でした。2010 年代後半にはニューラルネットワークやベクトル表現などが増え、2020 年代では、大規模言語モデルによる文章生成や要約、さらに画像なども組み合わせた処理へ広がっています。

2. 特許から見える「専門業務向け AI」の増加

では、具体的にどのような用途が増えているのでしょうか。

36,149 件の特許出願の「要約」を対象に、生成 AI を使って主要な用途に関するキーワード 30 個を抽出し、類義語を名寄せした上で、それぞれの累積件数（横軸）と直近 3 年の出願割合（縦軸）を可視化しました。



累積件数では「検索」が突出して多く、「翻訳」も主要な用途となっています。一方、これらは直近 3 年の割合が比較的低く、以前から

継続して開発されてきた用途と見られます。

これに対して、「不正検知」「サイバーセキュリティ」「教育」「金融」「規制対応」「法務・契約」「投稿監視・不適切コンテンツ対策」などは、累積件数自体はまだそれほど多くないものの、直近 3 年の割合が 35〜55%前後と高くなっています。つまり、自然言語・テキスト解析の用途が、「検索する」「翻訳する」といった汎用的な機能から、特定の業務や課題を解決するための技術へ広がっていると言えそうです。生成 AI というと、ChatGPT のような汎用サービスが注目されがちです。しかし特許情報からは、その技術が各業界・各部門の業務フローへ入り込み、それぞれの業務に特化した形へ分化し始めていることがうかがえます。

3. 知財では「調査」だけでなく「作成・評価・活用」も

その中で、知財関係者として注目したいのが「知的財産」の用途です。

前頁の図では、累積件数ではまだ大きな用途ではありませんが、直近 3 年の出願割合は 40%を超えており、今回抽出した 30 用途の中でも比較的高い位置にあります。このことから、知的財産関連は、近年になって出願割合が高まっている用途と見ることができます。具体的な出願内容を見ると、大きく「特許出願書類の作成」「特許調査・分析」「知財の評価・活用」の 3 つに分けられます。

特許出願書類の作成では、発明内容やクレームなどをもとに特許明細書を生成し、文書の構成や表現を調整する技術が見られます。特許調査・分析では、関連特許の検索や先行技術調査だけでなく、特許性・有効性・侵害の分析、競合分析、新規性確認など、より判断に近い領域まで対象が広がっています。さらに、事業上の資産として評価・活用する方向も見られます。知財データと企業、製品、技術などの情報を結び付けて分析したり、特許の評価や管理、ライセンス、取引などにつなげたりする技術です。このように、知財分野における AI 活用は知財業務全体へ広がり始めています。

4. 特許分析の現場では

多くの企業様の特許分析に関わる中で、わたし自身、生成 AI によって特許分析の現場が変わりつつあることを日々感じています。特許の内容を読み取ったり、分類したり、情報を整理したりする作業は、以前と比べて大幅に効率化できるようになりました。一方で、現状では AI が分析のすべてを自動的に行ってくれるわけではありません。そもそも何のために分析するのか、社内のさまざまな意見をどう整理するのか、得られた結果から何を読み取り、どのようなアクションにつなげるのか。こうした、本来最も考えるべき部分は依然として人間に残されています。むしろ、作業そのものが効率化されるほど、こうした部分に時間を使えるようになることが、AI 活用の大きな意味なのではないかと感じています。

また、生成 AI を使えば誰でも同じような分析ができるかというと、実際の現場ではそう単純でもありません。分析の目的が曖昧なまま AI を使えば、情報は大量に出てきても、結局何を伝えたいのか分からない資料になってしまいます。特許分析の基本的な考え方や、多くの案件を通じて培った経験があるからこそ、AI から得られた情報の取捨選択や修正ができ、分析として意味のある形にまとめられるのだと実感しています。

生成 AI によって特許分析のやり方は大きく変わりつつあります。しかし、AI に任せられる部分が増えることと、人間の役割が小さくなることは、必ずしも同じではありません。これからは、AI を使って作業を効率化しながら、人間は分析の目的や判断、そしてその先のアクションをこれまで以上に考えていく。そのような形に、特許分析の仕事も変わっていくのではないかと思っています。

今回の分析に使用した検索式はこちら
https://note.com/mutokenjiro/n/n0af0355cf72c

知財アナリスト 武藤謙次郎の
知財分析・情報発信サイト
https://mutokenjiro.jp/